のである。

ヒンドゥー葬送儀礼の先行研究としては、(象徴分析を通して儀礼過程と死生観を描写するもの)と(葬送儀礼を最後の通過儀礼として位置づけるもの)がある。前者では概して、葬送儀礼における「再生」のシンボリズムに注目し、死がいかに次の生に変換されていくかが描写される。例えばその代表格であるジョナサン・パリーは、同置の思想に基づいた身体と宇宙の相同関係、原人解体による世界創造神話を根拠にした、「供儀」が創造行為であるとする見方、破壊があつてはじめて創造が起こるといふ円環的世界観といったヒンドゥーの思想と巧みに結びつけながら、火葬儀礼は死者自身が供物となり火葬の薪に捧げられる「供儀」で本質的に創造行為であるとした。火葬後の儀礼の分析では、捧げられるピンダ(団子)が儀礼に参加する司祭と喪主によって食べられるという過程に注目し、不要な部分を排除し滋養分のみを残すという「消化」のシンボリズムを見出して、象徴的に食べられた死者は有用な「生命の源」になるという分析をしている。発表者は、このような分析では、サピンデーカラナによって死者が祖霊にとされた後にも、子孫によって個人として供養し続けられるという実態が捉えられないために不十分であると考ええる。

後者の先行研究においては、「葬送儀礼」の中に含める儀礼過程が様々で、物質的遺体処理に重点を置くもの、サピンデーカラナまでを描くもの、それ以後の儀礼も考慮できているものがある。発表者はこの状況を受け、死者・祖霊に対する儀礼全体における「葬送儀礼」の位置づけ自体を検討すべきである

うと考える。歴史を遡ると、死者がいつどのように祖霊にされるかは、時代によって様々であったことが分かる。この時代的変遷が凝縮した現代の葬送儀礼を見ると、死者と祖霊の境界は非常に曖昧なのである。ただ「通過儀礼」として現代の構造の葬送儀礼を見るだけではこの曖昧さは捉えきれず、だからこそ、時代的変遷を考慮しながら、死者・祖霊に対する儀礼全体を視野に入れた上で部分を見るべきであろう。そのためには、前者のような象徴分析ではなく、古代から現代に至るまで生者と死者がどのように関わってきたのかを描くという方法が有効ではないだろうか。

韓国葬墓文化と近代

——慶尚南道南海郡を事例として——

田 中 悟

本報告は、現代韓国における「葬墓文化」について、慶尚南道南海郡に事例を取り、現在までの変化の流れを跡づけることを目指す。その変容の流れを簡略にまとめれば、おおよそ「土葬→火葬の導入→納骨墓・納骨堂→平葬墓・自然葬」となる。そして、そのような変容が意味するところを、「近代」という観点から考察し、「葬墓文化」に関する示唆を読み取ることが、最終的な目的となる。

現代韓国において「葬墓」に関して最も深刻に受け止められている問題に、墓地によって広大な面積の土地が占領されてい

ること、そして墳墓の造成に伴って貴重な山林が無秩序に伐採されて環境破壊につながっていることが挙げられる。韓国における「葬墓文化」の近代化とはある意味、広大な面積を占めて山林や農地を侵食していく「伝統的墓地」や「豪華墳墓」を克服しようとする過程であった。報告で取り上げる葬墓施設「南海追慕ヌリ」を設置した慶尚南道南海郡は、法律で規制された後にもなかなか減ることのなかったそれらの違法な墓地を減らし、新しい「葬墓文化」を推進する取り組みの先進地域として、広く知られた地方自治体である。

「南海追慕ヌリ」における新しい「葬墓文化」への取り組みは、一九九〇年代から始まっている。まず、山林の際限ない伐採につながっていた従来の土葬墓から、あらかじめ整地して面積を制限した共同墓地への転換を図るとともに、土葬から火葬への転換を目指して、火葬遺骨の受け入れ先としての納骨堂や納骨塀を建てるなどした。さらに、二〇〇〇年代に入ると、南海郡で最初の公設火葬場が完成する(二〇〇六年)などして、「火葬・納骨」の流れが広がっていく。ただ、その一方で、石造の家族納骨墓や納骨堂の建物がかえって自然環境や観光開発の障害物となるという問題点が指摘されるようになる。そこで南海郡は、土饅頭を築かずに火葬した遺骨を埋葬する「納骨平葬」という形式を提唱し、埋葬にこだわりを持つ人々に配慮しつつ、納骨墓や納骨堂が抱える問題を解決しようとした。この形式の平葬墓は、新たな墓地の需要に應えるだけでなく、旧来の土葬墓からの改葬を促進することによる墓地面積の縮小の効果も期待されている。さらに二〇一〇年現在、「南海追慕ヌ

リ」にはいわゆる「自然葬」のための葬地も別途造成され、近代韓国における墳墓形態の過去・現在・未来を一堂に集めた見本市であるかのような姿を見せている。

さて、このような「南海追慕ヌリ」の現状をめぐって、「近代」という観点から、韓国の「葬墓文化」に関していかなる示唆が得られるのだろうか。

そもそも、韓国の葬墓についての長年の課題は、「土葬墓における一人当たり面積の制限」という問題であった。この問題が大きな動きを見せたきっかけは、一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけての「火葬の導入・普及」であり、南海郡においてはこの時期に納骨墓・納骨堂・納骨塀が導入され、自前の公設火葬場を設置するまでに至った。だが、その段階で新たに「人工物による空間の恒久的占有」への批判が提起され、埋葬安置の期限を切り、なおかつ遺骨と墓地自体についても自然還元への促進が意識されるようになった。そのような課題に應えるものとして導入されたのが、平葬墓や自然葬だったのである。

こうしてみると、そこに一貫しているのは、「土地利用の経済合理性」の追求という、きわめて「近代的」な論理だと言えるのではないか。墓地による広大な土地の占有に対して、その面積と期間とを極小化することで、土地の利用効率や生産性を上げようとするこの論理の前において、「文化」は果たして、どこにどのように位置づけられるのだろうか。